

まほうの森

きずなの物語



LS Morganによる短いお話



LS Morgan



目次

L.S.モーガン作品
まほうの森-きずなの物語
著者
著者への連絡

L.S.モーガン作品
カバー写真:オディール・シルヴァ・ディアス
翻訳:天谷 恭子

この作品はフィクションであり、みなさんを楽しませることが目的です。
登場する名称、人物、場所、出来事などは全て、著者の想像による
架空のものです。
何かに似ていたとしても、それはまったくの偶然です。

ALL RIGHTS RESEVERD

著者の事前の書面による同意がない限り、有形・無形問わず、いかなる手段に
よっても、本作品の全部または一部を保存・複製することは禁止されています。

著作権者の独占権を侵害した場合、民事上の責任および刑事上の責任
を負うこととなります。

まほうの森-きずなの物語

L.S.モーガンによる 短いお話

あらすじ: 友情・仲間をテーマにした、子ども・若者向けの短いお話です。2人の兄弟は、大おばさんの農園にむかう途中、魔法の森に迷いこみます。冒険、不思議、わくわく、楽しみがいっぱいです。

対象: 全年齢

- 2人の子供、ゴムパチンコ、笑い
- 魔法と友情の短いお話

• キーワード:

魔法
冒険
子供らしさ
楽しい
おもしろい
ノーム、小人
エルフ、妖精

まほうの森-きずなの物語

10月31日のさむい朝のことです。2人の兄弟、ニコラスとアーサーは、ぱちりと目を覚まし、わくわくしていました。ハロウィーンだから、というだけではありません。大おぼさんの農園に行くことになっているのです。どきどきする冒険や散歩をして、めいっぱい休日を楽しむつもりです。

「もっと食べなさい。」と言うお母さんの声も、2人の耳には入りません。カントリークッキー、カッテージチーズ、手づくりのパン、とうもろこしケーキ、新鮮な牛乳、近くでとれた果物などが、いっばいに並んだテーブルにも見むきもせず、あわててコーヒーを飲みこみました。今すぐに出発して、新しい世界を冒険したくてたまりません。

お兄ちゃんのニコラスは、8才、この冒険のリーダーです。広大なコーヒー農園へ続く道を、はりきって歩きだしました。ニコラスがリーダーとなったのは、お兄ちゃんだから、というだけではありません。リーダーとしてふさわしい、冒険の中で何かを決める力や、自分の意志をつらぬく力を持っていました。弟のアーサーは、5才です。お兄ちゃんのニコラスに従って冒険について行く勇気と、お兄ちゃんに対するあこがれを持っていました。

2人は、道に落ちていた小枝をにぎりしめ、胸をはずませながら、歩いていきました。「ヘビも、あぶない動物もいるわよ。コーヒー農園には、入ってはいけませんよ。」お母さんが、大きな声で呼びかけました。しかし、もう、2人の姿は見えません。言うことなど、ちっとも守っていないことも、お母さんには、わかりません。

「ヘビなんか、こわくないさ!」ニコラスは、持っていた小枝で、コーヒーの木をたたきながら、力強く言いました。

「ぼくも、こわくない!」アーサーも、胸をはり、自信たっぷり言いました。

「おまえは、ビビっちゃうぞ。学校のジュレマ先生が言っていたぞ。おまえみたいな小さなヤツを、一口で飲みこんでしまうヘビがいるって。こうして大きな口を開けるんだ。大きな、大きな口だ。」ニコラスは、両手をアーサーの頭の上に広げました。「ゴクン!おまえを丸のみにしたら、何ヶ月も眠ったままさ。」

「ゴクン!」と聞いたアーサーは、ドキリとしました。それでも、涙が出ないように、グッと目を開いて、シャンツと力を入れて立ちました。お兄ちゃんに、おくびょうものなどと思われては、冒険につれて行ってもらえない、と心配したのです。

「まあ、心配するな!ここ、バイーアには、そんな大きなヘビはいないよ。パンタナルとか、アマゾニアにいるんだ。」

「よかった、お兄ちゃん。いねむりヘビになんて、食べられたくないからね。」

「バカだな。眠っているヘビは、食べないよ。食べてから、眠るんだ。消化するためにな。ママが、いっぱいラザニア作ってくれて、全部食べたら、おなかいっぱいになって、眠くなるだろう。」

「それなら、起きているヘビに、食べられたくないな。」

「どんなヘビにだって、食べられないよ。」

「ほんとう？」

「ほうとうさ。もし、おまえがヘビに食べられたら、ママから、1か月の外出禁止にされちゃうよ。」

「そうか、外出禁止は、イヤだね。」とアーサーが言うと、

「ぜったいにイヤだ。」とニコラスはこたえました。

そして、2人は、また歩きだしました。草むらを飛びこえ、石や小枝をけり、木の葉をたたき、まだ緑色のコーヒーの実をつんで、空にむかって投げました。

突然、少し離れた森の中から物音がしました。2人は、びっくりして立ち止まると、息をひそめて、じっとしました。現れたのは、ホロホロ鳥でした。

「アーサー、おまえは本当にこわがりだな。」

「ぼく、何も言っていないじゃないか！」

「だって、オレのズボンをつかんでいるだろう。はなしてよ。」

アーサーは、はっとして、恥ずかしそうに、つかんでいた手をはなしました。

「ジャガー だと思ったんだ。お兄ちゃん、このあたりにジャガーはいない？」

「さあね。先生は、ジャガーのことは話してなかったよ。おばさんにも聞いてみたけれど、このあたりにはいないと思う。だって、ジャガーが、コーヒー農園を歩きたいと思う？ジャガーは、肉食だよ。アーサー、肉食動物っていうのはわかる？」

「わからない。」

「肉食動物は、肉を食べるんだ。だから、草とか、このあたりにあるものは食べないんだ。わかるか？」

「なるほどね。コーヒーを飲むのは好きじゃないから、コーヒー農園には来ないんだね。」

ニコラスは、アーサーの言うことはとんちんかんだ、と言わんばかりに、顔を手でおおい、首を横にふりました。

「わあ！」

「どうしたの？」

You've Just Finished your Free Sample

Enjoyed the preview?

Buy: <http://www.ebooks2go.com>